

実践報告

# 誰もがボールを追いかけて懸命に活動する楽しい体育指導について —児童の実態や思考を大切にしたいボール運動の6年生の授業を通して—

久保 明広\* ・ 堤 公一\*\*

Physical Education which every student would be eager to study delight  
through chasing after ball:

Teaching the ball-game in the sixth-grade class,  
with giving consider action to the actual situation and thought

Akihiro KUBO\* and Kouichi TSUTSUMI\*\*

## 【要約】

本研究は、小学校6年生の体育授業実践において、単元を見通したフローチャートを作成し、めあてや感想を次の時間に生かしていくことで、児童が主体的に思考し、活動する授業を進めていくことができた。またルールや場の工夫をしたことで、児童はその運動を十分楽しむことができ、自己評価として技能を高めることができた。

## 【キーワード】

フローチャート、ソフトバレーボール、ティールール、自己評価

## 1 研究の概要

### (1) テーマ設定の理由

「活動あって学びなし」「体育は身体を動かせばそれでよい」体育の学習においてよく耳にすることである。また、「習得と活用」国語や算数などの教科ではよく耳にするが、体育においてあまり話題になることはない。しかし、体育においても「習得と活用」は関係のあることであり、しっかりと意識していく必要があるはずである。学習指導要領の改訂で、小学校から高等学校までを見通し3つの時期を設けていることは、その表れのひとつだと私は考える。今回実践研究を行う6年生は「多くの領域の運動を経験していく時期」とされており、中学3年から高校3年生の「少なくとも一つの運動を選び継続していく時期」につなげるために、それぞれの運動の特性にしっかりと触れさせることが重要となると考えられる。

小学校学習指導要領解説体育編には『生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を培う観点重視し、各種の運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、児童の発達の段階を踏まえ指導内容の明確化を図ること』と改定の要点が記され、教師側が指導すべきこと、児童に学んでほしいことを明確に持つことが必要とされている。つまり、身体を動かすだけでよいわけではない。「活動あって学びなし」ではないのである。

しかし教師の一方的な思い、やらせる側の論理だけで授業を進ませるわけにはいかない。運動の持つ一般的特性に十分ふれさせながら、児童の内発的・外発的動機付けを大切にしたい授業を仕組ん

\*佐賀大学文化教育学部附属小学校

\*\*佐賀大学文化教育学部

でいかなければならない。そして、運動下位の児童はもちろん、上位の児童の誰もが楽しめる授業でなければならない。

クラスの児童にこれまで受けてきた体育の授業についてたずねてみると、学習カードをあまり活用することなく、1時間ごとにめあてを立ててそれを振り返るような経験はほとんどなく、体育が好きな児童とそうでない児童の二極化を感じた。

そこで、本研究では児童の実態や思考を大切にしたい授業、具体的には場の設定の工夫、単元を見通したフローチャートの作成、ふり返る力や自己評価力をしっかり伸ばし次の時間に生かしていくことなどを手立てとした授業をおこなっていけば、ボール運動の授業において誰もがボールを追いかけて懸命に活動することができると思え、本主題を設定した。

## (2) 研究の目的

ボール運動において、児童が懸命に活動し体育を楽しんでいると感じるために、児童の実態や思考を考慮した指導案を作成し授業に臨み、児童の感想やめあてを授業に活用していくことの有効性を明らかにする。

## (3) 研究の仮説

児童の実態や思考を大切にしたい授業をおこなえば、誰もが懸命に活動し、体育を楽しんでいることができるであろう。

## 2 研究の内容と方法

### (1) 研究の内容

- ① ソフトバレーボール、ティーボールの授業実践
- ② 授業についての検証と研究のまとめ

### (2) 研究の方法

- ① 児童の実態や思考をふまえて、指導内容を明確化したフローチャートを作成し、実践を行う。
- ② 技能レベルの上位・中位・下位の児童に焦点をおき、めあてや感想の変容をみる。
- ③ 学習カードやアンケートにより授業についての検証を行い、仮説の有効性を考察し、研究のまとめを行う。

## 3 研究の実際

### (1) 授業対象

対象 : T小学校 6年生 37名  
実施期間 : 平成23年5月～11月  
授業実践者 : K教諭 (10年目)


### (2) 授業の実際

- ① ソフトバレーボール (5月末～6月末まで週1回実施 6時間単元)

- i ルールや場の工夫

ルールの工夫をまとめた。またルールに対する教師の意図も記している (表1)。

表1 ソフトバレーボールのルールと教師の意図

ルール <i>明朝体の斜字は話し合いにより変更されたルール</i>	教師の意図
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 8 チーム (1 チーム 4~5 人)</li> <li>・ コートプレイヤーは 4 人 (5 人チームはローテーションでメンバー交代)</li> <li>・ 1 ゲーム 6 分 4 試合</li> <li>・ ボールはゴム製の小学生高学年用ソフトバレーボールを使用する (右写真)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コートは 3 面しかとれずゲームのないチームが 2 チームあるが、空いたスペースで練習や教え合いをさせたい。</li> <li>・ チームの人数を少なくして、ボールの接触機会を増やしたい。</li> </ul> 
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3 回以内で相手コートへ返す</li> <li>・ 基本的に時計回りにローテーションをする が、守備位置は自分たちで考えてよい</li> <li>・ ファーストレシーブ (1 触球目) はキャッチあり ⇒キャッチしてもしなくてもよい</li> <li>・ ネットに触ったら相手の得点</li> <li>・ サーブミスは相手の得点 ⇒1 回のミスまで OK, ネットインも OK</li> <li>・ ボールがライン上に落ちたらイン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 無制限にすると、バレーボールの特性を奪ってしまうと考えるが、5 回程度なら良いかもしれないので、回数は考えさせたい。</li> <li>・ 得意な子だけが前衛を守ることがないようにするため。</li> <li>・ キャッチありにすることで、3 段攻撃をしやすくする。</li> <li>・ ネット付近攻防の危険性をなくすため。</li> </ul>

ii フローチャート

児童の実態を想定し、指導内容および教師の主な言葉かけをまとめたものを事前に作成し、指導にいかしたものを最終ページに添付する (資料1)。


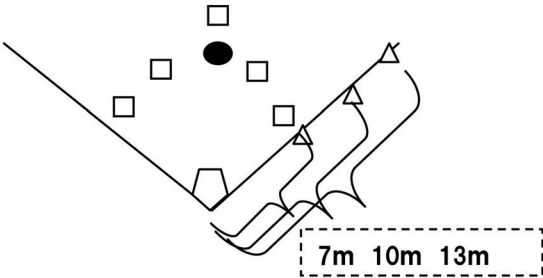
② ティーボール (10月初~11月初まで約週1回実施 6時間単元)

i ルールや場の工夫

ソフトバレーボール同様ルールの工夫をまとめた (表2)。

表2 ティーボールのルールと教師の意図

ルール <i>明朝体の斜字は話し合いにより変更されたルール</i>	教師の意図
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1 チーム 5 人の 7 チーム (1 チームのみ 6 人)</li> <li>・ 3 回までの攻防</li> <li>・ 1 イニング全員が打って交代</li> <li>・ 単元の最後 6 時間目に「6-3 カップ 優勝決定トーナメント大会」を設定 ⇒5・6時間目でおこなう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 打数、触球数を確保させる。</li> <li>・ 打者の機会を均等に。</li> <li>・ 5 時間目までに技能を高めていく動機付けとなり、勝敗を競い合う楽しさを味わうことにつながると考えるため。</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・コーンにボールを置いて打つか、味方に投げてもらいかの選択は自由（後に…3スイングアウトとルールを変更していきたい）</li> <li>⇒5スイングアウト</li> <li>・ ティーボール用のバットとボール（直径9cm）を使用する。ペットボトルを半分に切ったものをコーンに置き、ボールを乗せる（右写真）</li> <li>・ 打った後、1～3点のコーンのどれかを回り、ホームに戻ることができれば得点。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ボールをキャッチしどこかに置いたフラフープに、守備者2人とボールが集まり、「アウト」と叫んで座る</li> <li>⇒ボール持って集まるのではなく、フラフープにいる人に必ず投げる</li> <li>・ ホームに戻るランナーより「アウト」と叫ぶほうが早ければ、アウト</li> <li>⇒判断がつかない場合はジャンケン</li> <li>・ ノーバウンド（フライ）でキャッチもアウト</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ とにかくおもいきり打たせたい。</li> <li>・ 野球チーム所属の児童の気持ち（投げられたボールを打ちたい）も大切にしたい。</li> <li>・ 三振の緊張感は味わわせたい。</li> <li>・ 当たっても痛くなく、ある程度投げやすい重みのあるボール。</li> <li>・ 走塁のルールを単純にする。</li> </ul>   <ul style="list-style-type: none"> <li>・ アウトの判断が明確にならないときは相互判断させる。</li> <li>・ 後に、投げる・捕る機会を増やすために、フラフープにいる人に投げる、というルールを追加したい。</li> <li>・ 後に、守備位置・フラフープを置く位置について考えさせたい。</li> </ul>
---	---

## ii フローチャート

ソフトバレーボール同様作成したものを、最終ページに添付する（資料2）。

## ③ 考察

上記のルールやフローチャートをもとに、指導にあたった。

例えばティボールで「守備位置を考える」ことや「打つ方向をねらう」ことは、野球部に所属している子どもたちはすでに感想に書くことができ、実行することができていた。しかし、それを早い段階から全体に紹介せずに、少しずつその感想をもとに守備位置等を考えさせていった。例えば、《「15点入れたけど20点以上取られて負けて悔しい」という感想があったけどどうしたらいい？⇒「守り」を考える⇒「守り」について考えたことで失点が減る⇒相手も考えたため自分たちの得点も減る⇒得点をして、勝ちたい⇒「打つ」について考えてみよう。》

ソフトバレーボールでも最初の段階から素晴らしいめあてや感想（教師が意図してほしいこと）を書いている児童は多くいた。その児童らは学習カード等で個別に賞賛しながらも、全体には思いつきではなくあらかじめ指導すべきことを明確化して臨み、その時にあっためあてや感想を紹介したりルールの変更を考えさせたりした。そのことで、児童の思考（実態）に即した、児童が主体的に考えていけるような指導ができた。

(2) めあてと感想の変容

① ソフトバレーボール

i めあての変容

技能面において、上位・中位・下位児童を設定し、各児のめあてを時間ごとにまとめた(表3)。

表3 ソフトバレーボールのめあての変容

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目
上位 A	バレーボール になれる	パスをつなげ るようにする	サーブをちょ うどいい所に する	飛んできたボー ルを何として も落とさない	リーダーとし てみんなをよ く動かす	最後だからみ んなで協力し て勝つ
中位 B	バレーボール になれる	実際のゲーム になれる	新しいルール になれる	積極的におご く	その場に合っ た動きをする	励ましあいな がらする
下位 C	バレーボール になれる	ボールを好き な方向に投げ られるように なる	ボールを遠く まで飛ばせる ようになる	試合でもたく さん打つ	ボールが来た ら動いて打つ	試合でもボー ルの動きを見 て打つ

ii 感想の変容

各児の感想を時間ごとにまとめた(表4)。

表4 ソフトバレーボールの感想の変容

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目
上位 A	手をグーにし てねらいを定 めて打ったら うまいいった。 受けるときは やさしく上に 上げるとうま く上がった	初めてチーム を組んで対戦 したが、みん なまあまいう まかった。特 にサーブでは ほとんど成功 した。前回書 いたことが役 に立った。パ スを挙げると きは下から上 に手をふると あがる	パスがよくつ ながって2勝 できた	なかなかパス がつけられない… そのためにこ れからはみん なに「つない で！」と声を 出したらいい など気付いた	みんながよく 動いてくれる。 前回の声を出 すことをやっ たらみんな活 気づいてよかつ た	最初の2試合 はよく声が出 せてたので勝 てた。声が良 く出たらやっ ぱり勝っても 負けても楽し い
中位 B	サーブは力を 入れすぎない 方が良かった。 力を入れすぎ ると変な方向 に飛んでいく ことが分かつ た	ボールがネッ トの上の部分 にあたって向 こう側のコー トに入ったと いうことがあ ったので、新し いルールがで きた	ボールがコー トの後ろ側 に行っても、 がんばってボー ルを取りに行 って逆転でき る可能性がある ことがわかつ た	今夏は呼び声 やはげましが 多かった(O Kなど)	今回は動くこ とはたくさん できた。でも 動かない人が いるので練習 のときなどに できるだけボー ルを渡すなど するといいた 思った	今回はチーム が協力してい て4試合した 内3試合が勝 てた。ボール がアウトしそ うでもねばつ てカバーして くれる人がい た

下位 C	パスはなるべく前の方で打つと、前にとんだ	サーブはなるべく前の方で思いっきりとばすととんだ	ボールの方向は手を投げた方向にかたむけたりすととんだ	かけ声が前より増えた	試合や練習でも少し打てた。かけ声がふえた。	いつもより打てた。負けていてもあきらめたりしていなかった
---------	----------------------	--------------------------	----------------------------	------------	-----------------------	------------------------------

## ② ティーボール

### i めあての変容

ソフトボール同様、技能面において、上位・中位・下位児童を設定し、各児のめあてを時間ごとにまとめた（表5）。

表5 ティーボールのめあての変容

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目
上位 D	ゲームになれよう	ねらいをもって打とう	相手打者によって守備位置やフラフープの位置を変えよう	声を出しながらやろう（はげまし、アドバイス）	守備のサポートを早くしよう	最後のゲームは勝とう
中位 E	ゲームになれよう	チームで協力して点を取ろう	声（アドバイス）をかけて、相手に点を入れさせないように守ろう	守備位置に気をつける	あきらめない	楽しもう
下位 F	ルールになれよう	声かけをしながらゲームをしよう	1点だけでもいいから点を入れよう	考えて守備位置に立とう	声かけしながら1点でも多く取ろう	今までの力を発揮しよう

### ii 感想の変容

各児の感想を時間ごとにまとめた（表6）。

表6 ティーボールの感想の変容

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目
上位 D	相手のいないところに打つと得点のチャンスがある	相手の打者によってフラフープの位置を変えたり守備位置を変えると守りやすい	めあての作戦が上手くいった。相手打者がよく飛ばす人でも全員が下がらない（2人下がって2人残る、1人はカバー）	声を出しながらやったらチームの調子がよくなった（だましの声も効果あり）	フラフープ作戦（相手打者によって下げるだけでなく左右もかえる）はうまくいった	相手の裏をかいて打つたらうまくできた
中位 E	みんなで協力すると勝てるということがわかった	みんなで声をかけあってやると楽しくできた。それに勝てた	みんなでアドバイスをして打てる確率が高くなった	守備位置を気をつけたら相手にあまり点が入らなかった	あきらめなければ奇跡が起きるときもある	投げてもらって打つとちょっと打てるようになった

下位 F	上手い人がルールを教えてくれたから分かった。次もこうやって声かけをしていくといいのかなと思う	あまり上手に打てなかったのので、試しにバットの持ち方を変えてやってみようかなと思った	リーダーが「バットをもっと上に」と言ってくれたのでいっぱい打ったけど、1点も取れなかった。もう少し速く走るといいかも	守る所を考えた。打つことも教えてくれたから、上手くできた	初めて1点取れた。1点が取れた理由はたぶんボールを壊すような勢いで打つことだと思う	練習でボールを取れるかやってみて、いっぱい取れた。こういう練習をしとけばもっと上にいけたかもしれない
---------	--	--	--	------------------------------	---	--

③ 考察

めあてや感想の変容を技能別に見比べても内容に違いがないように感じた。なぜならそれぞれの種目の「技能」レベルと、自分のプレーを振り返り次に生かそうとする「思考」レベルが一致していないことが挙げられる。つまり、全くプレーは上手くできないが、上手くできるためや勝つために考えていることや気付いていることは素晴らしい場合がある。その理由の1つ目は全ての児童にめあてや感想が高まるような指導を随時行っているため。2つ目に本研究に限らず、4月からの体育の授業でふり返る力や自己評価力をしっかり伸ばし次の時間に生かしていこうと取り組んでいることが考えられる。つまり指導を素直に受け入れている児童は技能の上手下手に限らず、めあてや感想は教師の意図しているものに近づいているのである。

また、例えば「声」の重要性はソフトバレーボールで気づき習得できていた。だからティーボールで声についてレベルの高いめあてや感想が出てきたのは当然だといえる。

(3) 授業の検証

① ソフトバレーボール

i 楽しさ度の変化

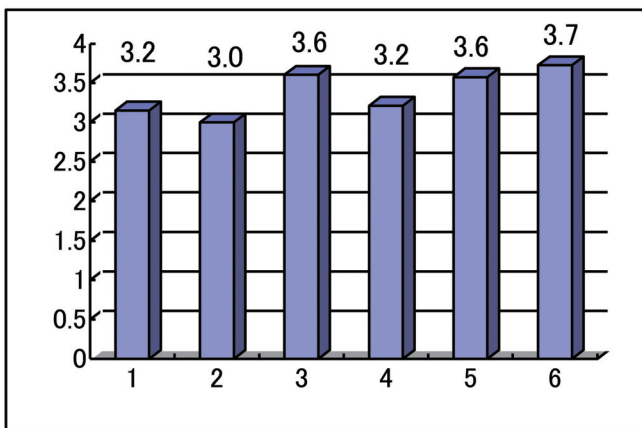


図1 授業の楽しさ度 (ソフトバレーボール)

図1は、学習カードに記入した「授業の楽しさ度 (最高4点)」のクラス平均値を時間ごとに示している。

1. 2時間目の値が低いのは、ルールに慣れていないためだと考えられる。4時間目の値が低いのは、ゲームの勝ち負けがはっきりし始め、チームによっては負けが続いたからだと考えられる。

このことより、児童にとってルールやゲームの勝敗は楽しさ度に関係すると推察できる。

ii 興味・関心、技能の変化 [事前・事後のアンケートより]

授業実践の前と後に「種目の好き度【1 (嫌い) ~4 (好き)】」と技能「パス・サーブ・動きがどれくらいできるか【1 (できない) ~4 (うまくできる)】」をたずねた。

表7 授業実践前後の自己評価

	好き度	パス	サーブ	動き
実践前	2.4	2.5	2.7	2.8
実践後	3.6	3.5	3.4	3.6

表7は授業実践前と後のそれぞれの項目の平均値である。

どの項目も値が高まっており、授業を楽しむことができ、技能も高めることができた判断できる。

## ② ティーボール

### i 楽しさ度の変化

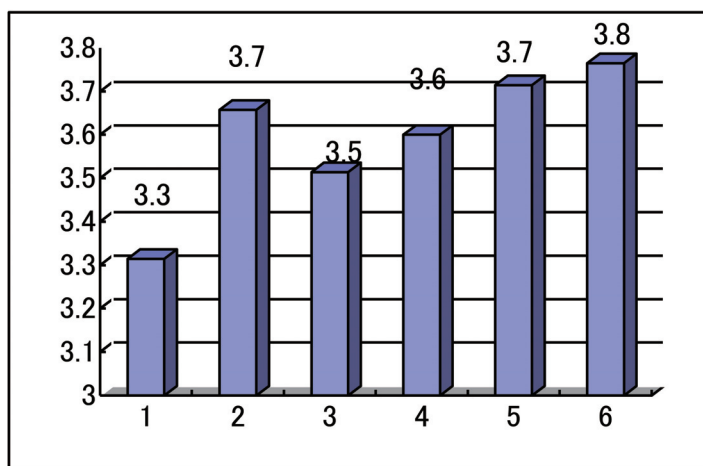


図2 授業の楽しさ度 (ティーボール)

図2は、学習カードに記入した「授業の楽しさ度 (最高4点)」のクラス平均値を時間ごとに示している。

ソフトバレーボールの時と違い、チームのバランスがよく勝敗の優劣がなかったため、時間を追うごとに楽しさはほぼ高まっている。ただ、児童の感想をみると、トーナメント戦 (5. 6時間目) で勝つことができなかった児童が楽しさ度を低くつけている場合はあった。やはり勝敗は楽しさ度に関係すると推察でき、チーム編成の重要性が浮かび上がってくる。

### ii 興味・関心、技能の変化 [事前・事後のアンケートより]

授業実践の前と後に「種目の好き度【1 (嫌い) ~4 (好き)】」と技能「打つ・投げる・守る」がどれくらいできるか【1 (できない) ~4 (うまくできる)】をたずねた。

表8 授業実践前後の自己評価

	好き度	打つ	投げる	守る
実践前	2.4	2.6	2.6	2.3
実践後	3.6	3.2	3.2	3.2

表8は授業実践前と後のそれぞれの項目の平均値である。

どの項目も値が高まっており、授業を楽しむことができ、技能も高めることができた判断できる。

表9 「種目の好き度」の平均値 (男女別)

	男	女
実践前	3.1	1.5
実践後	3.7	3.5

表9は男女別に「種目の好き度」を集計している。

野球に対して興味関心がもともと高かった男子児童も高まり、野球に対して興味関心がかなり低かった女子児童の値がたいへん高まっていた。

このことにより、誰もが授業を楽しむことができたといえる。



## 6 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

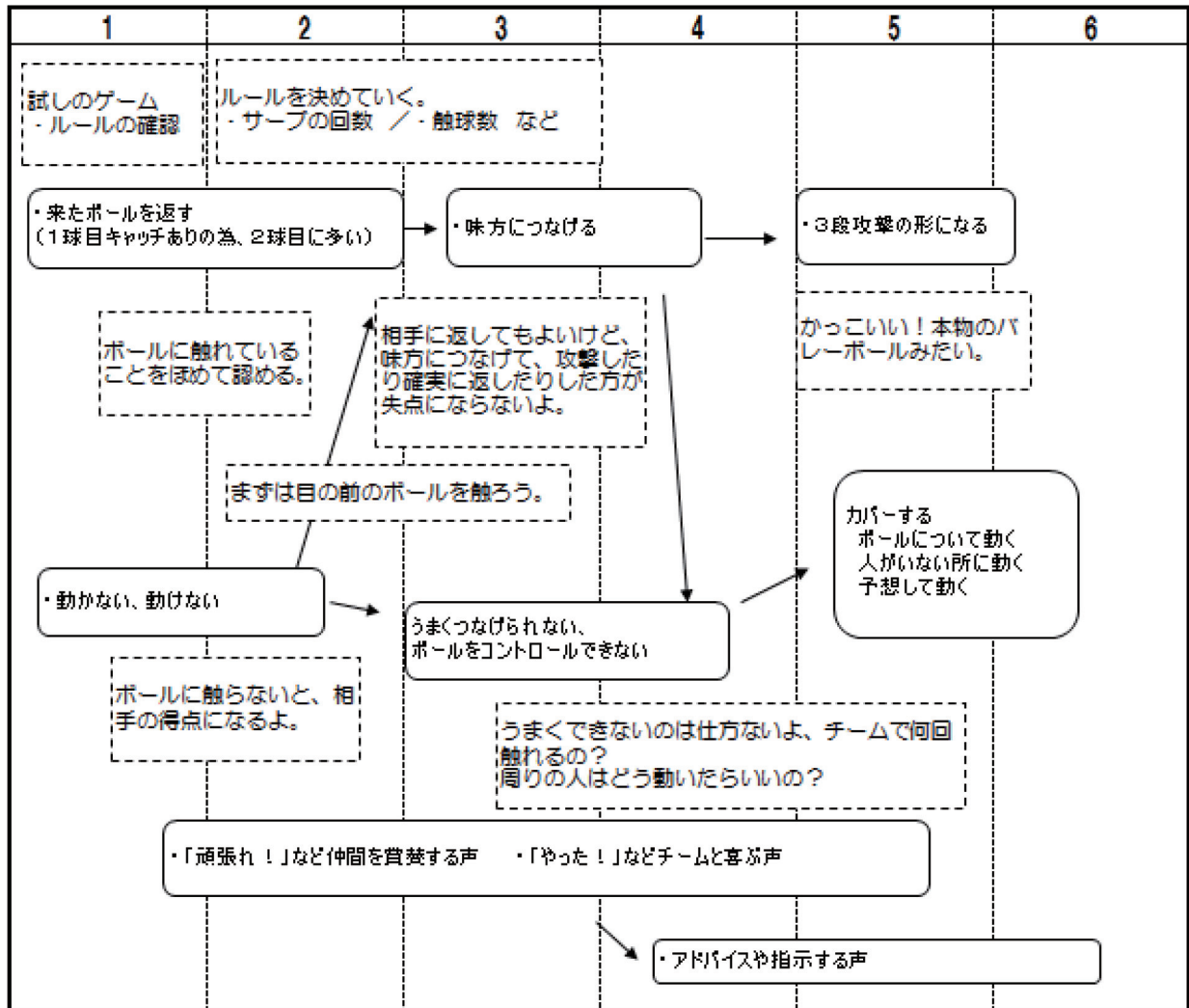
- ・ルールや場の工夫をしたことで、児童はその運動を十分楽しむことができ、自己評価として技能を高めることができた。
- ・単元を見通したフローチャートを作成し、めあてや感想を次の時間に生かしていくことで、児童が主体的に思考し、活動する授業を進めていくことができた。
- ・技能レベルの上位・中位・下位者ではめあてや感想に大きな変容はなかった。
- ・授業をふり返る力や自己評価力をきたえ、次の時間に生かしていこうと取り組むことで、めあてや感想がより具体的で質の高いものとなった。
- ・毎時間の授業の楽しさ度を左右する要因の一つに「ルールの徹底」と「勝敗」が関係していることがわかった。
- ・児童の実態や思考を大切に授業をおこなったことで、誰もが懸命に活動し、体育を楽しんでいることができた。

### (2) 今後の課題

- ・勝敗が未確定になるようなチーム編成と負けが続くチーム（個人）への個別指導（声かけ）。
- ・勝ち負けの緊張感を味わわせつつ、「負けたから楽しくない」と思わせないような指導。
- ・より児童の実態に合ったフローチャートになるような見直し。

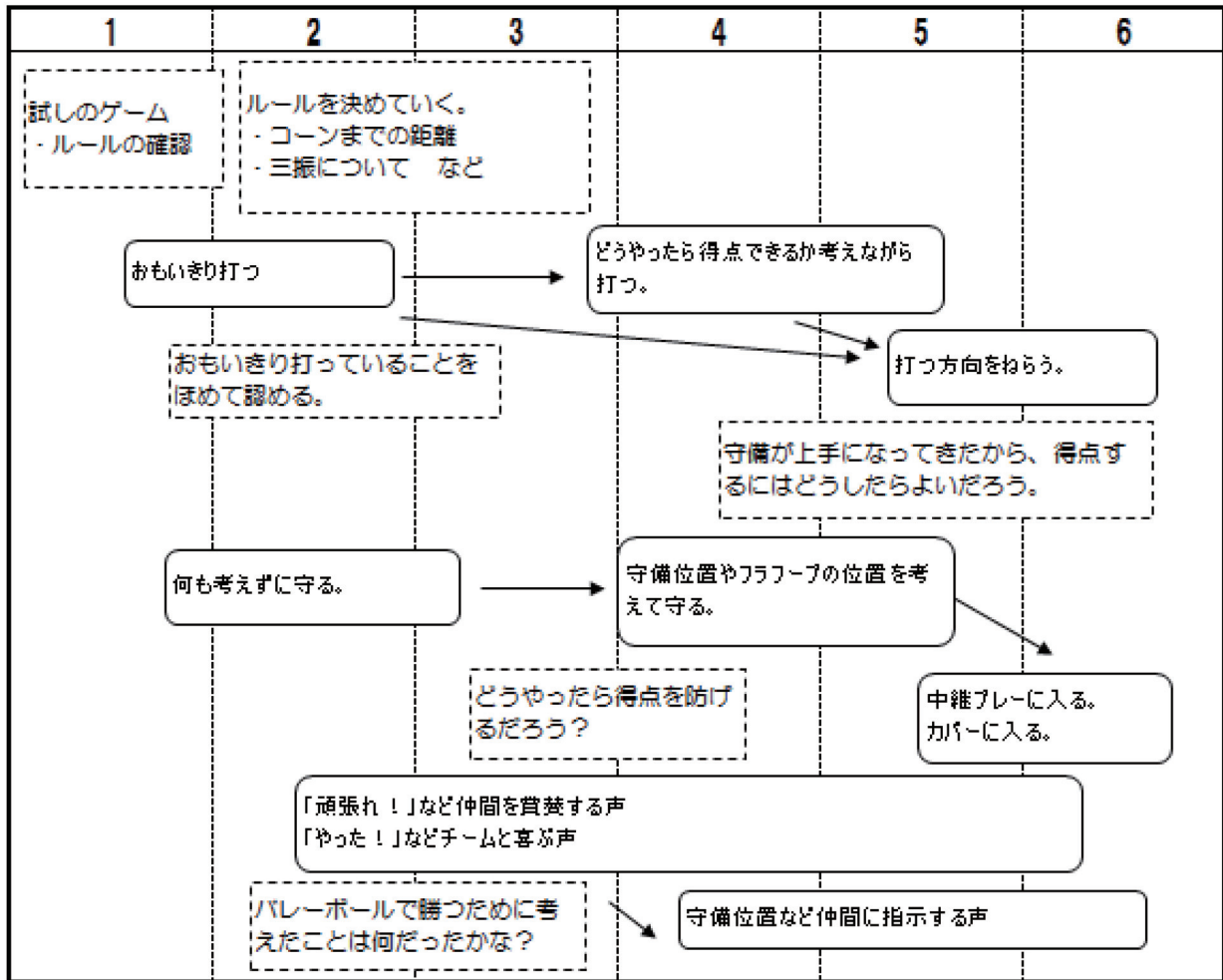
<資料1>ソフトバレーボール フローチャート

期待したい **児童の実態** と **指導内容（声かけ）**



<資料2> ティーボール フローチャート

期待したい **児童の実態** と **指導内容（声かけ）**



【引用・参考文献等】

- ・高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著（2010）新版体育科教育学入門．大修館書店
- ・久保明広（2010）平成22年度佐賀県小学校新教育課程説明会体育部会資料
- ・鈴木秀人・山本秀人・杉山哲司編著（2009）小学校の体育授業づくり入門．学文社
- ・佐藤豊（2009）体育における「知」の学習．体育科教育第57巻第10号：24-28
- ・鈴木秀人（2009）ゴール型ゲームの実践モデル．体育科教育第57巻第11号：32-34
- ・文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説体育編．東洋館出版社
- ・高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著（2002）体育科教育学入門．大修館書店
- ・佐伯年詩雄（2006）これからの体育を学ぶ人のために．世界思想社